

〔小笠原諸島固有種等遺伝資源の保護〕
小笠原固有植物等の病虫害防除技術の確立
～ヤエヤマアオキ白絹病の発生～
小野 剛・小谷野伸二・佐藤澄仁
(小笠原亜熱帯農業センター)

【要 約】糸状菌 *Sclerotium rolfsii* によるヤエヤマアオキの病害を認め、病名を白絹病としたい。

【目 的】

小笠原の海岸線に自生するヤエヤマアオキ(広域分布種)は潮害にも比較的強く、果実は健康食品としての利用もみられる。2006年9月、本種育苗中に枯死株が散見された。原因を調査した結果、新病害であったため報告する。

【方 法】

- 1) 発生状況および病徴を観察し、記録した。
- 2) 株元の菌核を次亜塩素酸ナトリウムで表面殺菌した後、素寒天培地で25℃・暗黒化で培養、伸長してきた菌糸を分離し供試菌を得た。
- 3) 分離菌をPDA培地上で生育させ、その後フスマを用いて増殖させたものを健全なヤエヤマアオキ苗のポット(直径12cm)に10g混和し、発病の有無を観察した。
- 4) 病原菌を光学顕微鏡で観察し、同定した。

【成果の概要】

- 1) 発生状況および症状：9月、ハウス内でのポット育苗中に地上部が立ち枯れる病害が発生した(図1)。地際部には白色のマット状の菌糸がまとわりつき、菜種状の菌核が多数発生する典型的な白絹病の症状を呈する(図2)。発生した苗は、数日前まで風通しの良い雨よけハウスで栽培されていたが、台風接近のために鉄骨ハウス内に移動させたロットで発生した。台風通過後、ハウス内は高温多湿条件が続いたため、発病を助長したと考えられた。
- 2) 病徴部および菌核からは同様の形状を呈する糸状菌が高率で分離された。
- 3) 分離菌の接種7日後に、自然病徴と同様な立ち枯れ症状を呈し、株元には白色の菌糸および菜種状の菌核が生じた。罹病部からは接種菌が再分離されたため、供試菌を病原菌と特定した。
- 4) 病原菌の菌糸は無色で隔壁を有し、かすがい連結がみられた。主軸菌糸の幅は4.5～8.5μmであった。PDA上の菌そうは白色で、茶褐色、球形～亜球形、表面が平滑で直径0.7～2.1mmの菌核を多数生じた。分生子や有性世代は観察されなかった。これら形態的特徴は、*Sclerotium rolfsii* Saccardoの記載とほぼ一致し、同種と同定した(表1)。
- 5) 本種によるヤエヤマアオキの病害は未記録である。病名は、表徴および本菌種による既報の病名から、白絹病(Southern Blight)としたい。



図1 立枯れ症状



図2 株元の症状

表1 ヤエヤマアオキ分離菌と *Sclerotium rolfsii* Saccardo との比較

菌株	主軸菌糸の幅 (平均)	かすがい 連結	菌核の大きさ(平均)	
			植物体上	PDA培地上
ヤエヤマアオキ	4.5 ~ 8.5 μ m (6.4)	有	0.7 ~ 2.0mm (1.2)	0.7 ~ 2.1mm (1.4)
<i>S. rolfsii</i> ^{a)}	4.5 ~ 9	有		1 ~ 2 (1.2)

a) Domsh et al. (1993)